

## 1. 本書の目標

本書の目標は次の力を身につけることである。

- ①N1レベルまでの語<sup>1</sup>のうちで、通常漢字で表記される語<sup>2</sup>を読んだり、一部は書いたりするのに必要な漢字力
- ②本書を通じて習得される漢字力を、未知語の読みと理解に応用できる運用力
- ③本書を通じて習得される漢字語<sup>3</sup>に接辞的に働く漢字をつけたり、他の漢字語と組み合わせて複合語を作ったりすることができる運用力

## 2. 本書の学習の範囲

本書で学習する漢字の範囲は、次の通りである。

- ①N1レベルの常用漢字880字<sup>4</sup>のうち、N1レベルまでの語を表記するのに必要な漢字677字、及びその読み方
- ②N2レベルの漢字の『新完全マスター漢字 日本語能力試験N2』で扱わなかった読み方<sup>5</sup>

## 3. 学習の進め方と使い方

### (1)全体の学習の流れ

第1部の訓読みから始めて、第2部音読み・特別な読み方に進む。第1部の訓読みで漢字の意味の理解をしながら基礎を作り、その上に第2部の音読みで漢字語彙を積み上げる。

### (2)各回の学習

まず学習のページにある練習問題と漢字リストを使って漢字とその語彙を学習し、その上でテストにより定着したかを確認する。テストは教室で一緒に練習してもよい。

N1レベルになると、未習語が増えかつ語の理解が難しいため、学習のページで漢字と語の理解を深められるようにした。

テストは、原則としてその回の範囲から出題している。ただし、第2部音読みでは、漢字リストにはないが、そこまでの漢字の音読みの知識と音変化のルールを知っていれば読める語も、少数だが出題しである。これは、前述の目標②に沿うものである。

なお、学習のページの漢字リストは、「第1部訓読み」と「第2部音読み」では、掲載した語の扱いが以下のように異なっているので、指導の際留意されたい。

第1部訓読みの漢字リストの見出し語は、訓読みの学習に必要な基本的な語とした。派生語、関連語等については次のようにした。

- ①動詞：自動詞・他動詞があるものは一方を見出し語とし、他方を例文の後に載せた<sup>6</sup>。派生語（「扱う」の「扱い」など）は、文法知識によって理解が可能であるので、省略した。複合動詞は載せていない。
- ②名詞、形容詞：複合語は、意味が類推できるものについては例文の後に載せ、それ以外は載せていない。
- ③リストに載せなかった語については、最後に参考資料として一覧が載せてある。これらは、訓読みの知識を使って読むことは可能であっても、意味・用法は別途学習が必要であると考えられる。教

えるかどうかは、学習者の状況に応じて適宜判断されたい。

第2部音読みの漢字リストに載せてある語は、学習対象漢字を使った語で、N1レベルで必要と考えられる語である。これ以上に拡張して教えることは、多くの学習者にとっていたずらに負担を増やすことになりかねない。むしろ、学習の段階で漢字の音読みとリストの語をしっかりと学び、未知語に出合ったときに持てる知識を応用できるようにすることを目指してほしい。音読みの漢字リストには、既習の訓読みをつけた。ただし、類推が可能なのは省略した。個々の漢字の音訓の確認は、これを利用していただきたい。

### (3)その他

広がる広げる漢字の知識

ここでは、主に目標の②と③の運用力に必要な知識を紹介し、練習をする。

模擬問題

学習の総まとめと実力の確認のためのテストである。能力試験の形式にのっとった訓読み、音読み、熟字訓の読み方と、語形成の問題から成っている。

チャレンジ

「漢字の意味」は、漢字の意味に注意を向けることを目的とした練習と、漢字語の意味推測の手掛かりの一つである文脈に注意を向ける態度を養うための練習である。「読解」は、現実場面の読む活動に本書で身につけた漢字力を生かすことを意図した練習である。

本書全体とこれらの練習を通じて、新しい日本語能力試験が求める「コミュニケーション上の課題を遂行する能力」につながる漢字力が養われることを願っている。

<sup>1</sup> 本書では、「日本語能力試験 出題基準」（1994年公開、2002年改訂）の1級語彙表をもとに、必要度や難易度の調査に基づいて調整を加えたものを、N1レベルの語彙としている。

<sup>2</sup> 本書では、「通常漢字で表記される語」の基準として、『現代国語表記辞典 第二版』の「標準的な現代表記」、「両様の形が行われているほかの表記」、「公用文や新聞で用いている別の形」を用いる。

<sup>3</sup> 本書では、音読みの熟語だけでなく、表記のすべてまたは一部に漢字が含まれる訓読みの語といわゆる熟字訓の言葉を含めて「漢字語」としている。

<sup>4</sup> 常用漢字1945字の中から、N2レベルの漢字1046字と、「日本語能力試験 出題基準」で除外字とされた19字（翁、虞、囁、且、侯、勺、爵、薪、帥、錘、畝、銑、但、脹、朕、奴、婆、匆、隸）を除いた残りの漢字である。

<sup>5</sup> N2レベルの漢字だが、それが作る語がN1レベルのものなど（例：「負」の読み「おう」）がこれに当たる。

<sup>6</sup> 自動詞・他動詞の区別は、『新明解国語辞典 第五版』による。

## 手引きの見方

太字 : その回で学習する漢字または漢字の語

□ : その語・漢字が提出されている回

下線 : 注意を要する部分

× : 誤りやすい字

特に表示がないものは、N2で学習済み

## 第1部 訓読み

訓読みは品詞別にし、さらに動詞は語と漢字の難しさによるレベル別、形容詞は語の形、名詞は分野別で構成した。学習は動詞Aレベルから始めるが、学習者の状況によっては動詞B、Cレベル(第3～6回)が難しいこともある。その場合は、身近な名詞を先に学習してもよい。

複数の訓読みがある漢字については、学習する回の一覧表をWebで提供している。また、同訓異義語についてもまとめをWebで提供している(URL: [http://www.3anet.co.jp/ukky/shinkanzen\\_k\\_n1.html](http://www.3anet.co.jp/ukky/shinkanzen_k_n1.html))。それぞれ必要に応じて復習に活用されたい。

なお、他の回で学習する関連語、及び学習ページのリストに載せてない関連語や複合語等については、最後(p.19)に表にまとめて示す。複合語などの学習は、学習者の状況に応じて判断されたい。また、以下の動詞は動詞Bレベルに相当するが、既習語から類推可能と考えられるため、第3、4回を通じて省いた。

自他の一方から類推: 荒らす、改まる、埋まる、植わる、遅らす、治まる、収まる、欠く、傾ける、備わる、務まる、慣らす、震わせる、負かす、満たす、休める

「～せる→～す」の形: 合わす、済ます、悩ます、任す

形容詞から類推: 固める、親しむ、高まる、強まる、鈍る、早める、広まる、深める、丸める、弱る

名詞から類推: 束ねる

### 第1回

第1回と第2回は、漢字はN1レベルだが、語としてはN2レベルの動詞を学習する。多くは学習者が既に語としては知っており、また日常生活

でもよく使われるものであるため、読み方中心に学習する。一部の未習と考えられる語は、例文とともに意味も理解できるようにする。

[留意点]

(1)アクセント、特に飼うなどの2拍の語に注意し、声に出して覚える。

(2)「繰る」は、複合語の繰り返すを学習する。

### 第2回

[留意点]

(1)「～に至る」「～を巡る」「～に～を譲る」は助詞に注意する。

(2)「透く」は複合語の透き通るを学習する。

### 第3回

第3回と第4回は、漢字はN2レベル以下だが、語としてはN1レベルの動詞を学習する。既習漢字であるが、語としては難しいので、意味・用法を押さえる。

[留意点]

(1)学習のページIIは、同じ字の既習音読みの復習も兼ねている。

(2)読み方が複数あるものは、他の訓読みを参考にしてよく確認し、意味・用法の違いも理解しておく。逃すと「逃がす」は送り仮名の違いにも注意。

(3)「～に背く」「～に富む」は助詞に注意。

(4)「計らう」は複合語の見計らうを学習する。

(5)抜かす、冷やかす、恵むの意味に注意。冷やかすは平仮名で書かれることも多い。

### 第4回

[留意点]

「～に～を強いる」「～に値する」は助詞に注意。

### 第5回

第5回と第6回は、漢字と語がともにN1レベルの動詞を学習する。学習者にとってかなりの漢字と語が未習でかつ字形が難しいというだけでなく、抽象語、ニュアンスが複雑な語が増えるので、読み方・意味を例文とともにしっかり覚える。

[留意点]

(1)「～に懐く」「～に挑む」「～に凝る」の助詞に

注意。特に「～に臨む」「～を望む」は助詞を間違えやすい。

(2)脅す、脅かすは「脅かす<sup>[1]</sup>」とともに読み方、送り仮名、意味の違いをここで復習する。

(3)添うは「付き添う」「寄り添う」など、継ぐは「受け継ぐ」「引き継ぐ」などの複合動詞の形で使用されることが多いことに触れたほうがよい。「受け継ぐ」はテストで出題しているが、意味が分かれば選ぶのは難しくない。

### 第6回

動詞の最後の回。

[留意点]

(1)同訓異義語は、障る、諮るの意味、顧みると「省みる<sup>[4]</sup>」、堪えると耐えるの違いに注意する。

(2)懲りと「凝る<sup>[5]</sup>」も間違えやすい語。

(3)「締まる」は複合語の取り締まるを学習する。

(4)この回で、動詞の同訓異義語、他の訓読みの復習をするとよい。

### 第7回

「い形容詞」を学習する。意味が理解しにくい語もあるので、例文と問題で意味・用法の理解を図る。

[留意点]

(1)送り仮名に注意。関連する動詞がIグループの場合、活用するところから送るのが基本だが、例外もある。

(2)粗いと「荒い」、堅いと「固い、硬い」、尊いと貴いは意味の違い・用法にも注意する。

(3)以下のものは、動詞との意味の違いに注意。惜しい-惜しむ<sup>[5]</sup>、悔しい-悔やむ<sup>[1]</sup>、懐かしい-懐く<sup>[5]</sup>、悩ましい-悩む、慌ただしい-慌てる<sup>[2]</sup>、紛らわしい-紛れる<sup>[6]</sup>(尊い-尊ぶ<sup>[3]</sup>、緩い-緩める<sup>[6]</sup>、騒がしい-騒ぐ<sup>[1]</sup>は動詞との関連で理解しやすい)

(4)汚らわしいと「汚い」の違いに注意する。

(5)良いは、平仮名で書くのが一般的。

### 第8回

な形容詞と副詞その他を学習する。意味が理解しにくい語や読み方が難しく定着しにくい語があるので、読み方を例文とともにしっかり覚える。

[留意点]

(1)複数の訓読みがある漢字が多く難しいので、この回までに学習したものの復習をするとよい。

(2)副詞その他の～難い、飽くまでは現代では平仮名で書かれることも多く、既に、及び、若しくはは平仮名のほうが一般的。

(3)月並みは送り仮名に注意(N2で学習した「並木」は送り仮名を入れない)。

(4)我が～、来る、～沿いの読み方・意味・用法に注意。

### 第9回

第9～11回は、名詞を分野別に学習する。名詞は、意味が具体的に比較的理解しやすいが、意味の確認が必要な語もある。学習者にとって未習語も多いと思われるので、絵や例文を通して意味を確認しながら、読み方を中心に学習する。

[留意点]

(1)綱、綱、縄は字形に注意。

(2)善しあしは「良し」にしない。

(3)怒りは「怒る(おこる)」の名詞形がないことの確認とともに、読みの定着を図る。

(4)供と「共」の使い方を間違えやすいので注意。

(5)柄の関連語の大柄、小柄は、「おおがら/こがらな人」の意では「大がら/小がら」と書くこともある。

(6)「利く」は複合語の左利きを学習する。

### ●広がる広げる漢字の知識 1 音の濁り

本書を学習する学習者なら、2語がつながった場合に連濁が起こることを経験的におおよ知っていると思われる。ここでは、その正確なルールを学習する。

### 第10回

具体的なものが大部分だが、いくつか意味が似ていて区別が難しいものがある。

[留意点]

(1)稲光、道端、矢印、井戸の連濁に注意。ただし、端(はた)は本書では道端のみを扱う。

(2)霧、霜、雷、渦、潮は結びつく動詞とともに覚えるようにする。テストにある「(潮が)満ちる」はN2で学習しているが、例文の学習のとき、「引く」の対語として確認しておいたほう

がよい。

- (3)丘と峰と峠、跡と「後」、街と「町」の意味の違い、墓と「暮」、縁と「緑」、塊と「魂」の字形の違いに気をつける。
- (4)筋は多義だが、例文で使用されている意味とストーリーの筋の2つをまずは押さえる。
- (5)頂一頂く、敷地一敷く①、踏切一踏む①+切るは、動詞とは意味が異なるので、注意させる。

## 第11回

この回で訓読みが終了する。

[留意点]

- (1)刃と刀、技と「枝」、曆と「歴」の字形に注意。
- (2)影と陰の意味の違いを理解する。多義でもあるので、注意。
- (3)公、手際、延べ、半端、趣は、例文で意味の理解を図る。
- (4)残高は、「残」が音読みだが、「売上高」「生産高」などの「～高」の使い方として、訓読みで学習する。濁ることに注意。
- (5)上、下が作る語は「川上/川下」「上座/下座」「上半期/下半期」は押さえておきたい。このほか「下二けた(桁×)」なども学習者によっては導入してもよい。
- (6)「更かす」は複合語の夜更かしを学習する。「夜」の読み方にも注意。
- (7)富一富む③、お釣り一釣る②、折一折る、果て一果てる④は、動詞から単純に意味が導けないので、意味の違いの確認が必要。
- (8)テストI⑤はリストにない語の問題。例文の学習のとき、下半期の対語として確認しておいてもよい。

## ●広がる広げる漢字の知識 2 言葉の構成

第2部音読みに入る前に、熟語の構成と複合語の形成を学習する。『新完全マスター漢字 日本語能力試験N2』が学習済みの場合は、「熟語の構成」は復習となる。

熟語の構成は、eは語例が少なく、fは否定の漢字のどれがつかうかが難しい。共に学習者に例を挙げさせたり作らせたりする練習は、注意が必要。クイズ2は、漢字はN2レベルで語としてはN1レベルの語や未習語が含まれており、学習者

に考えさせることを意図している。

複合語については、どういう語で複合語が作れるかは、言語の慣習によるところもあるため、学習者に例を挙げさせたりする練習は注意が必要。

## 第2部 音読み

音読みは、造語力がある重要な漢字を1回にまとめ、それ以外はその漢字によって構成される主な語の品詞別に提出している。さらに名詞を構成する漢字は、「する」をつけて動詞となる漢字とそれ以外に分けている。学習は、「する」がつく名詞を作る漢字から始めて、途中に重要な漢字を挟んでいる。その後は、形容詞、副詞その他、名詞と進む。前半に重要な漢字が多く含まれており、意味理解が難しい回が続くが、ここを乗り越えることが、漢字力獲得の大きなかぎである。

音読みのポイントの一つは、正確な読み方の定着と字形の区別である。そのため各回に「読み方のポイント」を載せ、声部が共通するものの読み方の異同がまとめてある。その回で提示してもよいし、あるいは第30回まで学習してからまとめて整理してもよい。なお、声部が共通する文字としてまとめたものの中には、形声文字ではないものと音符が異なるものが一部含まれている。これらは、学習者の便宜の観点から同じグループに入れたものである。

音読みの漢字語の多くは2字の組み合わせであるため、一方の字が未提出の漢字語はその回のリストには載せていない(例:「飲」は第12回で学習するが、「声」は第25回で学習するため、「歓声」は第12回には載せておらず、第25回の「声」の欄に載せてある)。そのような他の回で学習する漢字語の一覧をWebで提供しているので、参考にされたい(URL: [http://www.3anet.co.jp/ukky/shinkanzen\\_k\\_n1.html](http://www.3anet.co.jp/ukky/shinkanzen_k_n1.html))。

## 第12回

第12回と第14～16回で、「する」をつけて動詞としても使われる名詞を中心に学習する。中でもこの回で扱っている漢字と語は、使用頻度の高いものである。ただし、「する」がつけられない語や、退屈のように形容詞としても使われるものも含まれている。

[留意点]

- (1)学習のページIは、既習の和語の動詞と漢語の動詞の関係を理解する。和語はすべてN2レベル、漢語も「納入する」以外はN2レベルである。学習のページIIは、答えの漢語はすべてN2レベルであり、「むかえる」などの和語動詞を手掛かりに推測して熟語を作る。
- (2)「名詞+する」の動詞には、自動詞になるもの、他動詞になるもの、自他両方に使われるもの(「縮小する」など)があるので、語ごとに確認する。
- (3)援助・応援・救援、採択・選択は、意味と用法にも注意。

[読み方のポイント]

悟: 共通声部(五)、五・語・悟はすべて「ゴ」であることを確認するとよい。以下の回[読み方のポイント]も同様。なお、形声文字の声部と読み方の関係については、第17回の後の「広がる広げる漢字の知識 4 形声文字」で学習するので、ここで触れる場合は、確認を促す程度でよい。

## 第13回

造語力がある基本的な漢字(N1レベルまでの語が3つ以上あるもの)を学習する。語の数が多いだけでなく、N1レベルの語が多いので、第2部では学習者にとって一つの山である。だが、N2レベルの語が含まれる漢字、訓読みが既習の漢字も多いので、それらを手掛かりに読み方と意味を身につける。他の回の漢字と組み合わせるものも多く、ここでしっかり覚えることが後の学習につながる。なお、抛、薦は語が3語ないが、熟語の関係でこの回に入れてある。

[留意点]

- (1)学習のページIは、⑤以外はN2レベルの語で導入するようになっている。
- (2)興(「楽しむ」と「始まる、盛んになる」)、謝(「お礼を言う」「謝る」「断る」)、推(「推す」と「推測する」、ただし「推す」は本書では学習しない)、素(「もともと持っているもの」と「もともになるもの」)、徴(「印」と「強制的に取る」)は、複数の意味に注意させる。弁は「話す」の意味の語を作ることも確認する。
- (3)源(収入源など)、策(解決策など)、視(重要

視など)は他の語について多くの新しい言葉を作り出す漢字。

- (4)抛、興、素、模は2種の読みに注意。特に興は、「楽しむ」の意味は「キョウ」、「始まる、盛んになる」は「コウ」と、ほぼ規則的に対応する。
- (5)概要・概略、簡素・質素、謝絶、徴収、精密は、意味と用法にも注意。
- (6)テストIIIは一部訓読みの復習もある。

## ●広がる広げる漢字の知識 3 音の変化

『新完全マスター漢字 日本語能力試験N2』が学習済みの場合は、復習が中心となるが、ルールの定着はなかなか難しく、繰り返して学習することが必要である。クイズ1はすべて既習漢字だが、未習語が含まれており、学習者に考えさせることを意図している。

## 第14回

主にN1レベルの語を作る漢字であるため、第12回に比べると難しいが、複数の熟語を作るものが多く、基本的な漢字である。

[留意点]

- (1)学習のページIは和語動詞との対応を理解し、読み方をしっかり覚える。学習のページIIは対語の関係を使って意味を理解する。
- (2)「する」がつく名詞は、技術革新、抗議行動、学費免除など、複合語を作る語が多い。
- (3)後悔、勘定は読み方に注意。
- (4)革新・革命・改革・変革、破棄・放棄・廃棄、反抗・抵抗は、意味と用法にも注意。

## 第15回

第15回と第16回で学習する漢字の熟語は、ほとんどがN1レベルである。この回は、その中でも複数の熟語や日常よく使われる熟語を構成する漢字を学習する。学習者にとっては未習語が多いと思われるので、語の意味とともに読み方を覚える。

[留意点]

- (1)学習のページIは和語動詞を手掛かりにして意味を理解し、読み方をしっかり覚える。学習のページIIは、Iよりも使用頻度が高い語の問題で、名詞と結びつけて覚えるようにする。

(2)学習のページⅢはどのような複合語が作られるかの理解を意図している。

(3)弁償・補償、補償・保障<sup>13</sup>・保証は、意味と用法にも注意。

(4)交代は、本書では「交替」(N2で学習済み)と区別していない。寄贈は「キソウ」とも読むが、本書では「キゾウ」のみとした。

[読み方のポイント]

勸：共通声部(韃)、勸・観・飲<sup>12</sup>は「カン」、権のみが「ケン」。

## 第16回

ほとんどが1漢字1熟語なので、語として学習するのが効率的。ただし、選、繁は3つ以上、抑、励、裂は複数の語を作る。第15回以上に未習語が多いと思われるので、丁寧に意味を確認する。

[留意点]

(1)学習のページIは、和語動詞を手掛かりに意味を理解して、読み方を確認する。和語動詞は、②「はばむ」、④「はげます」の復習が必要な場合もあろう。

(2)学習のページIIは、組み合わせる③「規制」、④「内部」がN2では学習していないので、意味が分かっているかの確認が必要な場合がある。

(3)辛抱(濁る)に注意。暴は、「あばれる」の意味では「ボウ」、「あばく」の意味では「バク」とほぼ規則的に対応するが、「あばく」の意味では暴露を押さえるだけでよいので、あえて触れなくてもよい。

(4)還(環×)は字形に注意。

## 第17回

第18回と併せて、な形容詞として使われる語を構成する漢字を学習する。この回は、主に人に関係する(人や人の部分・行為を形容する、心情を表す)形容詞を中心に、プラスイメージの言葉(I)、マイナス・中立イメージの言葉(II)に分けて提出した。ただし、頑のように頑固・頑丈と両方で使われるものもある。また、他の品詞の語を構成する漢字も含まれている。

[留意点]

(1)意味が難しいものが多いので、意味を押さえ

る。プラスとマイナスに分けてあるが、反対語(敏感と鈍感など)は対応させて教える。

(2)接尾辞「～さ」を伴って名詞化する語が多いが、つけられないものもある(不吉など)。

(3)慎重は、読み方に注意。

(4)軽べつは「けいべつ」と平仮名表記されることが多い。駄の「駄目」は、「～したらだめだ」「結果はだめだった」の意味のときは平仮名表記が一般的であるため、本書では取り上げていない。吉は「キチ」と読む語は本書では扱わない。

[読み方のポイント]

謙：共通声部(兼)、兼<sup>15</sup>・嫌・謙すべて「ケン」。ただし、嫌の音読み語で学習するのは、「機嫌」のみで「ゲン」と濁る。

## ●広がる広げる漢字の知識 4 形声文字

第2部音読みの第12、15、17回の「読み方のポイント」で、共通声部を持つ漢字について触れており、また経験的にある程度の知識を持っている学習者もいると思われる。ここでは、読み方が同じになる場合と異なる場合があることを含めて、改めてルールを整理し、共通声部に注目する態度を養うことを目的とする。

クイズの漢字はすべて既習であるが、共通声部を持ち違う発音となる漢字の例では、(a)の「請<sup>25</sup>」、(b)の「疲<sup>19</sup>」、(c)の「眼<sup>19</sup>」がこの時点では未習である。

## 第18回

主に判断・評価を表すな形容詞と副詞を構成する漢字を学習する。学習する漢字の数と語の数が多いので、必要に応じて例文などの提示を工夫されたい。

[留意点]

(1)学習のページⅢは第17回で提出されたものも含まれている。

(2)驚異、抽象はな形容詞としては「～的」が必要。過剰は、複合語を作ることも多い(過剰生産など)。

(3)副詞は「に・と」が必要なものと不要なものがあるので、語の形にも注意させる。

(4)奇数は、対語の偶数も確認するとよい。

(5)肝心(濁る)、貴重、細工、懸念は読み方に注

意。

(6)徐(除×)は字形に注意。

(7)膨張は、膨脹も可だが、本書では一般的な表記の膨張のみとする。邪魔は、平仮名表記されることもある。

[読み方のポイント]

盛：共通声部(成)、成・盛(「ジョウ」とも)・誠<sup>17</sup>は「セイ」、城のみ「ジョウ」。

烈：共通声部(列)、列・烈・裂<sup>16</sup>は「レツ」、例のみ「レイ」。

## 第19回

第19～30回までは、主に名詞を構成する漢字を分野別に学習する。この回は、実生活に必要な語が多く、意味は比較的理解しやすい。

[留意点]

(1)学習のページIは実際の場面に即して、IIは絵によって、語の理解と定着を図る。

(2)患者(濁る)、下痢は読み方に注意。

(3)診察・診断・診療は、意味と用法にも注意。

(4)消耗は、慣用的な読み方の「ショウモウ」のみ扱う。

[読み方のポイント]

娠：共通声部(辰)、振<sup>14</sup>・娠・震すべて「シン」。

胴：共通声部(同)、同・胴・銅は「ドウ」、筒のみ「トウ」。

疲：共通声部(皮)、皮・披<sup>16</sup>・疲は「ヒ」、波・破は「ハ」。

## 第20回

この回も生活に密着した語が中心だが、学習者にとっては未習と思われる語も含まれる。1漢字1語が多いので、絵を利用して、語の意味・読み方の定着を図る。

[留意点]

(1)「～棟」は、具体的に名詞を入れて確認する(研究棟などのほか、病棟も。テストに出題)。

(2)天井は濁るが、「ショウ」と読む語はないので、このまま語として覚えればよい。扇子は読み方に注意。井は「セイ」の読み方は本書では扱わない。

(3)テストのI⑥、⑩、IV iは漢字リストにない語を出題しているが、読み方は難しくない。「官

邸」は使用頻度の高い語。

[読み方のポイント]

荘：共通声部(壯)、壯<sup>18</sup>・莊・装(「ショウ」とも)すべて「ソウ」。

邸：共通声部(氏)、低・底<sup>14</sup>・抵<sup>14</sup>・邸すべて「テイ」。

## 第21回

意味が難しい名詞が多い(貫録、体裁、面目など)ので、学習のページだけでなく、必要に応じて例文を提示するなど、工夫されたい。

[留意点]

(1)自己は、さまざまな語と結びついて複合語を作るので、それらにも注意させる(自己紹介は既知の学習者も多いだろう)。また、自己・自分・自身・自我<sup>14</sup>の意味と用法の違いにも注意。

(2)複合語の礼儀正しい、親孝行なども、実際の使用例が多い。テストにも出題。

(3)女房、相性、根性(濁る)、体裁は、読み方に注意。

(4)遇(偶×)、孝(考×)、墓(募×、暮×、慕×)は、字形に注意。

(5)休暇・余暇、郷土・故郷・郷里は、意味と用法にも注意。

(6)貫録は、「禄」が表外字のため、この表記が一般的。お辞儀は平仮名表記が一般的。

[読み方のポイント]

忠：共通声部(中)、中・忠・衷<sup>16</sup>すべて「チュウ」。

## 第22回

[留意点]

(1)学習のページIは未習語が多いが、絵を見れば意味の確認は易しい。

(2)学習のページIIの接辞はテストにも出題しており、学習者の状況に応じて、さらにいろいろな言葉につけて応用練習をさせるとよい。

(3)唯一は読み方に注意。

(4)箇所、括弧、途端は平仮名表記されることが多い。～遍は平仮名表記が一般的。

[読み方のポイント]

緯：共通声部(韋)、偉・違・緯は「イ」、衛<sup>13</sup>のみ「エイ」。

紀：共通声部(己)、紀・記・起は「キ」、改は

「カイ」、己<sup>21</sup>は「コ」。

距：共通声部（巨）、巨・拒<sup>15</sup>・距すべて「キョ」。

遍：共通声部（扁）、偏<sup>21</sup>・遍・編すべて「ヘン」。

### 第23回

身近な語が多い一方、学習者にとって未習と思われる語もいくつか含まれる。

[留意点]

学習のページⅡは、学習者にとって身近な語を会話を通じて身につける。学習のページⅢは未知語が多いと思われるので、意味を確認する。

[読み方のポイント]

攻：共通声部（工）、工・功<sup>12</sup>・巧<sup>18</sup>・攻・紅・貢<sup>12</sup>すべて「コウ」。

旨：共通声部（旨）、旨・指・脂<sup>19</sup>すべて「シ」。

俳：共通声部（非）、非・悲は「ヒ」、俳・排<sup>15</sup>・輩<sup>21</sup>は「ハイ」。

### 第24回

ニュースや新聞でよく目にし、また耳にする言葉が多い。聞いても分かるように、読み方をしっかり覚える。

[留意点]

(1)為と偽は、共通声部を持ちながら読み方が違うので注意。

(2)牲（性×、姓×）、堤（提×）は、字形に注意。

(3)意味がよく似た言葉が多く、以下の言葉は意味と用法にも注意。行為・行動、破壊・崩壊、群衆・群集、攻撃・襲撃・反撃、捜査・捜索、背景・背後、刑罰・処罰。

[読み方のポイント]

儀：共通声部（義）、義・儀<sup>21</sup>・犧・議すべて「ギ」。

盲：共通声部（亡）、亡・忙<sup>17</sup>・望は「ボウ」、盲・網<sup>22</sup>は「モウ」。

### 第25回

[留意点]

(1)学習のページⅠを使って、近代国家の仕組みにかかわる語を学習する。学習者によっては、裁判制度や司法関係の語（裁判官、裁判員、検事、弁護士など）、地方自治などに拡張して学

習することも可能である。

(2)施、請は熟語が多く、重要な漢字である。

(3)天皇は「オウ」が「ノウ」に変わる。皇（オウ）のほかの語は本書では扱わないので、このまま覚えることも可であるが、反応についても触れて、音の変化を確認するとよい。

(4)郡（群×）は、字形に注意。

[読み方のポイント]

申：共通声部（申）、申・神・紳<sup>21</sup>すべて「シン」。

侵：共通声部（侵）、侵・浸<sup>24</sup>・寝すべて「シン」。

請：共通声部（青）、青・清・晴・精・静・請は「セイ」、情のみ「ジョウ」。

征：共通声部（正）、正（「ショウ」とも）・征・政・整は「セイ」、症・証は「ショウ」。

敵：共通声部（商）、適・滴・摘<sup>15</sup>・敵すべて「テキ」。

### 第26回

[留意点]

(1)穀物は読み方に注意。

(2)食糧・食料は意味と用法にも注意。

[読み方のポイント]

裁：共通声部（戔）、裁<sup>13</sup>・載<sup>23</sup>・栽すべて「サイ」。

紡：共通声部（方）、方・放・訪・倣<sup>16</sup>は「ホウ」、坊・防・妨<sup>16</sup>・肪<sup>19</sup>・房<sup>20</sup>・紡は「ボウ」。

酪：共通声部（各）、各・格・閣<sup>25</sup>は「カク」、客は「キヤク（カクとも）」、落・絡・酪は「ラク」、略は「リヤク」。

幹：共通声部（干）、干<sup>14</sup>・刊・肝<sup>18</sup>・幹は「カン」、岸は「ガン」、軒は「ケン」。

掌：共通声部（尚）、尚<sup>17</sup>・掌・賞・償<sup>15</sup>は「ショウ」、常は「ジョウ」、党は「トウ」、堂は「ドウ」。

舗：共通声部（甫）、捕<sup>24</sup>・補・舗すべて「ホ」。

### 第27回

[留意点]

(1)学習のページⅠは「お金の流れ」を概観する。単に問題の語を読ませるだけでなく、図の中の「家計、投資、利子」などのN1レベルの語の読み方と意味、「公共団体、金融政策、金融機

関、公共投資、労働力」などの複合語や接辞のついた語の読み方と意味も確認しておくとい。学習者の状況によっては、流通、企業と労働者の関係、金融機関の仕組み等に発展させることも可能である。

(2)融通は、読み方に注意。

(3)宣（宜<sup>18</sup>×）は字形に注意。

(4)織は「ショク」の読み方は本書では扱わない。  
[読み方のポイント]

儉：共通声部（兪）、儉・劍<sup>17</sup>・険・検・験すべて「ケン」。

購：共通声部（構）、構・講・購すべて「コウ」。

債：共通声部（責）、責・積・績は「セキ」、債のみ「サイ」。

組：共通声部（且）、阻<sup>16</sup>・祖・粗<sup>18</sup>・組は「ソ」、査は「サ」、宜<sup>18</sup>は「ギ」。

履：共通声部（復）、復・腹<sup>28</sup>・複・覆<sup>24</sup>は「フク」、履のみ「リ」。

浪：共通声部（良）、朗<sup>23</sup>・浪・廊<sup>20</sup>は「ロウ」、良のみ「リョウ」。

### 第28回

教科書を通じてはなかなか学習する機会がないと思われる語が多いが、実生活で使われる語も多い。学習のページⅠ、Ⅲの絵、Ⅱの文を通じて読み方と意味を学習する。

[留意点]

(1)細胞は、「ホウ」が濁るが、この漢字を使ったほかの語は本書では扱わないので、このまま覚えても可。[読み方のポイント]の項、参照。

(2)海峡（狭×、挟×）は字形に注意（海に関する語だが、偏は「山」）。

[読み方のポイント]

飼：共通声部（司）、司・詞・飼すべて「シ」。

星：共通声部（生）、生・姓・性・星・牲<sup>24</sup>はすべて「セイ」。「生」と「性」は「ショウ」の読み方も。

胞・飽：共通声部（包）、包・抱<sup>16</sup>・胞・砲<sup>24</sup>・飽はすべて「ホウ」。ただし、辛抱<sup>16</sup>、細胞が「ボウ」、鉄砲<sup>24</sup>が「ポウ」と変化するので、それも確認したほうがよい。

摩：共通声部（麻）、麻<sup>19</sup>・摩・魔<sup>18</sup>はすべて「マ」。

### 第29回

[留意点]

(1)「ちょっと一休み」は、クイズとして楽しむだけでなく、学習が目的ではない。②「正体」はN1レベルの語で、読み方と意味を確認したほうがよい。

(2)道徳・倫理の意味と用法に注意。公衆道徳、政治倫理などの複合語にも触れておくとい。

(3)封建、遺言は読み方に注意。遺言は法律用語では「イゴン」だが、本書では扱わない。

(4)憤慨（噴<sup>28</sup>×、概<sup>13</sup>×）、孤（弧<sup>22</sup>×）、宗・崇は字形に注意。

(5)喪失・紛失<sup>25</sup>、風俗・習慣・慣習、民俗・民族は、意味と用法にも注意。

(6)黄金（コン×）は、黄は「コウ」の読み方は本書では扱わず、また金（コン）のほかの語も扱わないので、このまま覚えるのも可。仰は、「ギョウ」の読み方は本書では扱わない。

(7)沈殿は、「澱」が表外字なので、この表記を用いる。

### 第30回

[留意点]

(1)学習のページⅠは、IT関連で必要な語を取り上げた。既に日常生活で使っている学習者も多いだろうが、英語で済ませていることもあるので、読み方と意味を定着させるとともに、パソコン使用時に語が分かるようにする。③「圧縮」は12回で既習、②「容量」はN2で学習していないが、音読みの組み合わせで読ませたい。ここで取り上げた語のほかに、既習の「検索<sup>23</sup>」、「消去」（N1レベル語でN2では学習していない）なども確認するとよい。

(2)学習のページⅢは、名詞と動詞の結びつきについて、学習者の母語との違いに注意させる。幕は、膜<sup>28</sup>との違いにも注意。

(3)趣旨・要旨<sup>23</sup>は意味と用法にも注意。

[読み方のポイント]

怪：共通声部（叅）、徑<sup>22</sup>・経・輕<sup>17</sup>は「ケイ」、怪のみ「カイ」。

監、鑑：共通声部（監）、監・艦<sup>25</sup>・鑑は「カン」、濫<sup>16</sup>のみ「ラン」。

彩：共通声部（采）、彩・採・菜すべて「サイ」。

拍：共通声部（白）、白・拍・泊・迫<sup>25</sup>・舶<sup>26</sup>すべて「ハク」。

霧：共通声部（分）、粉<sup>20</sup>・紛<sup>25</sup>・霧は「フン」、分は「ブン（フンも）」、貧<sup>17</sup>は「ヒン（ビンも）」、盆<sup>28</sup>は「ボン」。

魅：共通声部（未）、未・味・魅すべて「ミ」。

### 第31回

常用漢字表付表にあるいわゆる熟字訓の言葉の中で、N1レベルの語と、漢字がN1レベルであるためにN2では学習しなかったものを学習する。

[留意点]

- (1)「叔」「伯」「撰」「凹」「凸」は特別な読み方の語としてのみ提示し、音訓は本書では扱わない。
- (2)叔父・伯父、叔母・伯母は読み方のみ確認すればよく、その使い分けまでは必ずしも習得する必要はない。
- (3)語としては、**玄人、素人、心地、名残、為替、差し支える**が難しいので、例文とともに意味を確認する。
- (4)**心地**は、動詞マス形の「ます」を除いた部分と結びついて「**乗り心地**」などの語を作ること、その際連濁が生じることに注意させる。
- (5)学習のページIの「**玄人—プロ**」「**素人—アマチュア**」は、意味として必ずしも同じではないので、用例を示して確認したほうがよい。

#### 参考文献

- 金田一京助・山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄（編）（1997）『新明解国語辞典 第五版』三省堂  
 国際交流基金・日本国際教育支援協会（編）（2002）『日本語能力試験 出題基準 改訂版』凡人社  
 白川静（2003）『常用字解』平凡社  
 武部良明（編）（1992）『現代国語表記辞典 第二版』三省堂

## 第3部 力試し

### 模擬問題

第4回<sup>6</sup>、<sup>9</sup>、<sup>11</sup>、第5回<sup>6</sup>、<sup>7</sup>は、漢字リストにはない語で、応用力を問う問題である。いずれも使用頻度が高い語が選んである。

### チャレンジ 漢字の意味

複数の意味を持つ漢字がどの意味で使われているかを問う問題と、漢字の意味だけでは熟語の意味が分かりにくい語の意味を問う問題である。前者は、漢字が持つ複数の意味を覚えるというより、漢字の意味に注意を向ける態度を養うことを目的とする。後者は、推測に使える手掛かりをできるだけ多く利用できるように、文脈にも注意を向ける態度を養うことを目的とする。

### チャレンジ 読解

実際の言語活動で漢字力を生かすことを意図した練習である。日本語の文章では、内容語の多くに漢字が含まれ、漢字語（特に熟語）がキーワードになることが多い。読むことが苦手な学習者は、文章の表層の言葉を一つ一つ追って読むことに多くの注意を割かれて、全体としてポイントがつかめないことが多い。この練習では、見出しと冒頭の部分で文章のテーマに見当をつけ、それを手掛かりにキーワードを見つけて全体の意味を大きくとらえる読み方を経験することを目的としている。

#### 参考資料：関連語、複合語など

回	語	他の回で学習する関連語	関連語・複合語・その他 (本書では扱っていない。(N2)とあるものは『新完全マスター漢字 日本語能力試験N2』で学習)
1	3 沿う	～沿い <sup>8</sup>	
	5 酔う		酔っ払い
	12 扱う		扱い、取り扱う、取扱い
	19 吐く		吐きけ
	25 響く		響き
	28 稼ぐ		共稼ぎ
	29 騒ぐ	騒がしい <sup>7</sup>	騒ぎ
	34 励ます	励む <sup>5</sup>	
	35 繰り返す		引っ繰り返す、引っ繰り返る
	41 踏む	踏まえる <sup>6</sup> 踏切 <sup>10</sup>	踏み込む
	42 恨む		恨み
	43 縮む		縮まる
	44 悔やむ	悔しい <sup>7</sup>	
	45 膨らむ		膨れる
	2	2 釣る	
4 振る		身振り <sup>9</sup>	振り向く、振り返る、振り仮名、振り出し
7 盛る			盛り上がる、目盛り
10 飾る			飾り、着飾る、首飾り
33 訴える			訴え
35 掛ける			掛け～、～掛け、腰掛ける、出掛ける、心掛ける、仕掛ける、手掛ける、お出掛け、思い掛けない、腰掛け、心掛け、仕掛け、手掛かり
40 焦げる			焦げ茶
43 慌てる		慌ただしい <sup>7</sup>	
46 兼ねる			気兼ね
49 締める			締め切る、締め切り
50 攻める			攻め
53 勧める			勧め
54 眺める			眺め
56 揺れる		揺らぐ <sup>5</sup>	揺さぶる
3		7 恥じらう	恥じる <sup>4</sup> 、恥 <sup>9</sup>
	18 逃す		見逃す
	21 志す	志 <sup>9</sup>	
	22 明かす		明ける(N2)
	23 生かす		生きる(N2)
	24 抜かす		抜く(N2)、抜ける(N2)

	25	生やす		生える (N2)
	31	尊ぶ	尊い [7]	
	33	富む	富 [11]	
	35	歩む		歩み
	38	恵む		恵み、恵まれる (N2)
	40	危ぶむ	危うい [7]	
	4	3	煙る	
10		群がる		群れ (N2)
12		交わる		交じる
14		強いる		強いて
16		恥じる	恥じらう [3]、恥 [9]	恥ずかしい (N2)
17		重んじる		重い (N2)
20		試みる		試み
22		絶える		絶えず (N2)、途絶える
24		構える		構え、構う (N2)
35		果てる	果て [11]	果たす (N2)
40	値する	値 [11]		
5	1	添う	添える [6]	
	10	懐く	懐かしい [7]	
	14	継ぐ		受け継ぐ
	16	揺らぐ	揺れる [2]	揺さぶる
	22	催す		催し
	24	尽くす	尽きる [6]	
	29	励む	励ます [1]	
	33	惜しむ	惜しい [7]	
	34	織る	織物 [9]	
35	凝る		凝らす	
37	漏る		漏れる	
6	4	粘る		粘り
	6	誇る		誇り
	16	取り締まる		取り締まり、戸締まり
	17	尽きる	尽くす [5]	
	19	減びる		減ぶ
	23	据える		据え付ける
	24	添える	添う [5]	
	30	控える		控室
	32	踏まえる	踏む [1]	
	33	駆ける		駆け足
38	緩める	緩い [7]、緩やかな [8]		
41	紛れる	紛らわしい [7]		

7	1	良い		良し
	7	緩い	緩める [6]、緩やかな [8]	
	8	尊い	尊ぶ [3]	
	12	危うい	危ぶむ [3]	危ない (N2)
	13	惜しい	惜しむ [5]	
	17	悔しい	悔やむ [1]	
	23	騒がしい	騒ぐ [1]	
	24	懐かしい	懐く [5]	
	26	甚だしい	甚だ [8]	
	27	華々しい	華やかな [8]	
29	慌ただしい	慌てる [2]		
31	紛らわしい	紛れる [6]		
8	6	盛んな	盛り [11]	
	9	細やかな		細かい (N2)
	13	華やかな	華々しい [7]	
	14	緩やかな	緩める [6]、緩い [7]	
	15	清らかな		清い (N2)
	18	月並みな		並 (並み) (N2)、軒並み
	20	我が～	我々 [9]	
	23	～治い	治う [1]	
28	甚だ	甚だしい [7]		
34	並びに		並ぶ (N2)	
9	21	我々	我が～ [8]	
	29	織物	織る [5]	
	30	柄		間柄、事柄、人柄
	42	身振り	振る [2]	
	43	恥	恥じらう [3]、恥じる [4]	恥ずかしい (N2)
	46	志	志す [3]	
	48	情け		情けない
10	29	筋		大筋、一筋
	39	跡		跡継ぎ
	48	敷地		座敷、屋敷
	49	踏切	踏む [1]	
11	24	富	富む [3]	
	26	値	値する [4]	
	31	小遣い		～遣い、仮名遣い、言葉遣い、 無駄遣い (17回 25駄に提示)
	39	夜更かし	更ける [4]	
	47	果て	果てる [4]	
50	盛り	盛んな [8]		